

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 12 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K16713

研究課題名(和文) Musicus・Musikantの概念を用いた近代ドイツ音楽教授史の総合的な研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study of the History of Modern German Music-Teaching using the concept of Musicus / Musikant

研究代表者

小野 亮祐 (ONO, Ryosuke)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10611189

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では18世紀～19世紀中ごろのドイツの音楽家養成を、古い音楽家の対概念 Musicus(演奏の他、作曲、指揮をする)と、Musikant(演奏のみ)で検討をした。18世紀以前、Musikant型は徒弟制の中で、Musicus型は知的エリートの教育を受けつつ教会文化との関わりの中で、音楽の技能を身につけた。そして19世紀半ばからは、音楽院を経た養成が本格化する。両時代間ではMusikant型は徒弟制の中で、国家による制度化が開始され、Musicus型は学校化へと向かいつつ以前の高い音楽教育レベルが維持されていた。また、19世紀半ば以降の音楽院は、この両タイプをクロスオーバーする場でもあった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西洋音楽史的な面から言えば、徒弟制度型音楽家養成 音楽院・開放型ヴィルトゥオーソの養成という単線型の史的展開の合間を埋め、傍系として見られていた教員養成の領域に音楽家を生み出す力があつたことを改めて明らかにできた。一方、教科教育の展開や教育思潮ばかりに目が行きがちだった音楽教育学の面からは、このような教員養成と音楽家の関係は従来顧みられることがなかった。このような両学問領域の盲点を指摘し、改めて音楽家養成の歴史には解明すべき点が多くあることを浮き彫りにしたことに意義があつたと考えている。

研究成果の概要(英文)：In this study, the historical development of German musician training from the 18th century to the middle of the 19th century is described by old musician Types, so called Musicus (composer, music director, and musician with academic knowledge) and Musikant (musicians who only play instruments).

Before the 18th century, the Musikant type instruction acquired music skills in Apprenticeship System. And the Musicus type acquired music skills in relation to churches and schools while receiving intellectual elite education. And from the middle of the 19th century, training through the Conservatory (College of Music) began in earnest. Between both period, the Musikant type had an apprenticeship system, too, but the institutionalization by the state began. The Musicus type instruction was more institutionalized (en-school), but the required music level was still high as before period. It was also revealed that the Conservatory after the mid-19th century was a place to cross over both types.

研究分野：西洋音楽史 音楽教育史

キーワード：ドイツ Musicus Musikant 音楽家の養成 宮廷楽団 教員養成所 (Lehrerseminar) 学識 大学

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始以前より、研究代表者は主に 17～19 世紀の鍵盤楽器教本を中心にしながら、ドイツにおいてどのような音楽の社会的需要をもとに音楽教授の内容が成立し、変遷・展開しているかを研究していた。その中で、鍵盤楽器や通奏低音の教本の需要者・対象者については、いわゆる貴族や上流の市民（18 世紀の Liebhaber などに代表される）を相手にしていると思しき部分もありながら、いわゆる宮廷（劇場を含む）などの音楽家、教会音楽家、学校の教師などと幅広いことがわかっていった。教会音楽家、教師となると教会のオルガン演奏を行う者である。中でも西洋音楽史のなかでの鍵盤楽器教授については、いわゆる通奏低音も即興演奏も指揮もできる音楽家の養成から、19 世紀以降のヴィルトゥオーソピアニストへの転換を基調に先行研究で語られた史的展開モデルがあった。しかし、それだけではないことにわたくしは違和感をいだいていた。というのも、前述の鍵盤楽器教本に見られた 18 世紀までの教育的な様相が、その後 19 世紀に入っても教会音楽家や学校の教員養成の場で残存するからである、このことは従来のいわゆる作品様式史（19 世紀に入って作品がヴィルトゥオーソ的ありようになっていく）を中心にした西洋音楽史研究の限界であると考えた。特に学校教員や教育の場が見逃されていたことは、かねてより音楽教育学の領分であり、従来の西洋音楽史研究の埒外にあったと言えよう。しかし、音楽教育学側も、教科教育としての音楽教育の成立史や、著名な音楽教育思潮への強い興味関心はあっても、先に述べた点については目が向いていない。本研究の背景にはこういった研究分野の領分意識への批判も多分に含まれる。

## 2. 研究の目的

そこで現代の西洋音楽史の理解方法とは離れる必要を感じ、かつ古くからの音楽家のありようとの連続性を念頭に置いた新たな研究の視点を得る必要があると感じた。そのため古い音楽家の概念ではあるが、いわゆる手仕事としての音楽家である Musikant 型（演奏をするのみ）と Musicus といわれる幅広い見識を持ち作曲や楽長などを務められるようなタイプの 2 つの概念の下で、改めて音楽教授の様相を見てゆき整理することとした。

18 世紀以降から 19 世紀半ばまでの音楽家養成について、教会型の流れから一元的にその展開をとらえ、そこに並行する徒弟制度型の変遷を整理する。そして、この整理をもとに前者は Musicus 型、後者は Musikant 型の対概念のもとで捉えつつ、資料収集を進め、両者の変遷と相互関係に焦点を当て、総合的に捉えなおそうとするのが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

まずは Musicus 的教授の音楽教本・手稿譜、及び教会における音楽家の在り方、学識的な背景の先行研究の調査を行い、改めて Musicus 的な音楽家のありようを整理した。それを受け Musicus 型・教会型の専門教育と、学校における音楽教授を現地調査を含めて一元的に捉えてゆくこととした。

Musicus 型の音楽家とその 19 世紀以降の変遷を明らかにするため、教会音楽に携わった人々、およびそれに付随して学校教師を兼任していた人々の記録、また学校教師、教会音楽家を養成することとなった教員養成所 Lehrerseminar、学校教員の採用試験の記録について調査することとした。

そして、Musikant 型の音楽教授の調査を進める中で、ダルムシュタットの宮廷楽団の音楽教授のまとまった記録があることが明らかになった。そこで、当初と予定を変更しこの宮廷楽団の資料調査を行うことにより、同タイプの音楽家の音楽教授に迫ることとした。

当初は Musikant 型の調査のためにライブツィヒ音楽院の調査を行ったが、調査を進めるうちに当初の予想を超えて、Musicus 型と Musikant 型のちょうど仲立ちをするような立ち位置にもあったことが明らかとなった。そこで、ライブツィヒ音楽院でオルガンを専攻した学生たちの調査を行い、この両タイプの音楽家の 19 世紀以降のありように迫ることとした。

## 4. 研究成果

Musicus 型の音楽家の整理をし、また教会音楽に携わる人々の現地資料の調査を行う中でまず明らかになったことは、このタイプの音楽家は伝統的なキリスト教的な学識を背景に有する人々であることである。より具体的に言えば、ギムナジウムや大学に通っていた、いわゆる当時としてはごく一部の知的エリートが中心であったということである。一般にこれらの人々は、宮廷や政府の役人、法律家などになる人物が多くみられる一方、牧師や学校の教師などといった教会関係の職に就く。特に後者の場合 18 世紀ごろまでは聖職者に着くまでの腰掛け的な職として学校教師があり、また教師は教会音楽に携わったケースが多かったようである。Musicus 型を対象者とした音楽教本は、各地の大都市から小さな村々に至る無数の学校・教会に携わる人々に需要があったものと思われる。このような当時の教会音楽を担当した学校教師の蔵書記録の調査からは、やはり一定の学識をもつ人物であったことが明らかとなった。

これが組織的に養成されるようになるのは、18 世紀後半に設立が始まる教員養成所においてである。この学校では今日的な意味でいうところの教員養成大学・学部に対応する教育施設であったが、いわゆる一般の学術的な専門科目の他にオルガン演奏、ヴァイオリン演奏、ピアノ演奏、通奏低音、作曲などの非常に豊富で高度な音楽の授業が施されていた。また、入学者に対しても

将来教会音楽を担当することが期待されていたこともわかった。そしてなによりも、学校教員の採用試験において教会音楽の担当能力を試す試験があり、そこでは演奏等のみならず与えられた歌詞に対して作曲をし実際に演奏をする試験があったことも分かった。つまり、教員養成所の音楽教育は資料に書かれている通りであり、また 18 世紀以前の音楽監督等に求められるレベルと内容の音楽能力が要求されていたことが明らかになった。このように、18 世紀の Musicus 型の音楽教育のありようは 19 世紀以降教員養成所と、数は少ないものの教会音楽家とギムナジウムの音楽教師の養成に特化した教育機関である教会音楽学校 Institut für Kirchenmusik (プロイセン王国によりベルリンとブレスラウに設置された)へと徐々に引き取られていったと思われる。

ダルムシュタットの宮廷楽団の音楽教育については、19 世紀初頭の音楽教授についての資料が残っておりそれらを調査した。調査を通してまず明らかになったのは、同じ楽団の子弟が家族間で交換されて教育が行われていたことである。いわゆる徒弟制的なあり方であるが、習う人間は同じ家族ではない。このことは、ポンの宮廷楽団におけるベートーヴェン家とリース家のエピソード(ベートーヴェンが、フェルディナント・リースの父に習った)を思い起こさせるが、逆にこのエピソードは、広く当時行われていた音楽教授上の慣習であったことを推測させる。そして、ちょうどこのころのダルムシュタットは音楽に理解のある領主であったこともあり、こうした楽団内での教育に対して予算を付けて国で面倒を見るということが行われていた。まだドイツではいわゆる音楽院の設立前で、公教育として制度化されていないものの、予算的なバックボーンとして制度化され始めていたことが伺える。これはのちに設立されるライプツィヒ音楽院が同地のゲヴァントハウス管弦楽団の奏者が教師となり、生徒が同オーケストラと密な関係の中で教育が受けられるなど、このような形へと公的な教育施設が整備されるにいたる前段の両者の関係をつかがわせる。

そして、19 世紀においては教員養成所を卒業した学生や教職についていた人々が、教職を経てライプツィヒ音楽院に入学し、教職・教会音楽以外の音楽職に就く例が見られた。19 世紀の Musicus 型の音楽家が、教会音楽、学校教師にとどまらず、新たに設立された音楽院を通じて音楽職の幅を広げていく様相がみられた。

上記の当初の研究計画に基づく基本的な研究成果と合わせて、派生的な研究成果も得られた。本研究当初の調査において、子供を対象とした音楽教授について調査を進めていた際に、いわゆる伝 L. モーツァルト《おもちゃのシンフォニー》のタイプの、おもちゃを使った音楽がまとも存在すること発見した。この調査を進める中で、そもそも 18 世紀以前にベルヒテスガーデンの音楽と呼ばれていたおもちゃの楽器を使うジャンルがいったん廃れ、19 世紀以降に復活し再び一つのジャンルとして確立されていたことを明らかにできた。

また、元来は本研究の中に含まれる予定ではなかったのだが、並行して共同研究で行っていた F. バイエル(1806-63)の研究成果と、本研究の音楽家養成の研究成果が相乗効果で知見を得ることとなった。というのも、バイエルについては従来詳しいことはわかっていなかったが、調査を進めるうちに、いわゆる上記でいうところの古い Musicus 型の教育を受けて音楽家となった人物であったからである。そのことから、バイエルのことを明らかにすることが本研究を進めるうえでのヒントとなり、また本研究成果をより補強するものとなったと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 小野亮祐	4. 巻 23
2. 論文標題 19世紀ドイツ語圏の教員養成所における音楽教育と採用時の音楽能力の関係に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽教育史学会創立30周年記念誌（音楽教育史研究第23号 & 音楽教育史学会創立30周年記念誌合併号）	6. 最初と最後の頁 93-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小野亮祐	4. 巻 71(1)
2. 論文標題 8世紀ドイツのオルガニストの音楽家像, 学校教師像：古典派時代のある無名オルガニストの遺産関係文書を手掛かりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要. 教育科学編	6. 最初と最後の頁 295-305
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小野亮祐	4. 巻 52
2. 論文標題 19世紀中ごろのドイツの教員養成における音楽教育 - グリンマの教員養成所Lehrerseminarを例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 釧路論集 北海道教育大学釧路校研究紀要	6. 最初と最後の頁 93-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小野亮祐	4. 巻 70
2. 論文標題 19世紀ドイツにおける教育機関設立後のオルガン教育 - 創立1843年から1880年ごろまでのライプツィヒ音楽院の本試験Hauptpruefung、学籍簿Inskription、学修証明書Zeugnisからの考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要(教育科学編)	6. 最初と最後の頁 253-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小野亮祐	4. 巻 49
2. 論文標題 音楽家の教育史的背景 ～ヨーロッパにおける「音楽家」とキリスト教的教養の關係に注目して～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 釧路論集 北海道教育大学釧路校研究紀要	6. 最初と最後の頁 117-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小野亮祐	4. 巻 68
2. 論文標題 ドイツにおける「子どもの音楽」の歴史的考察 : J. F. Kelzの子供の音楽に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要. 教育科学編	6. 最初と最後の頁 467-474
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小野亮祐
2. 発表標題 19世紀初めのダルムシュタット宮廷楽団における音楽教育資料概観
3. 学会等名 日本音楽表現学会第19回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野亮祐
2. 発表標題 19世紀ドイツにおける「《おもちゃの交響曲》現象」序説
3. 学会等名 日本音楽表現学会
4. 発表年 2018年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 小野 亮祐、安田 寛	4. 発行年 2021年
2. 出版社 株式会社音楽之友社	5. 総ページ数 272
3. 書名 バイエルの刊行台帳	

1. 著者名 増山賢治、徳永崇、小野亮祐、伊藤真、原田宏司、大迫知佳子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 増山賢治先生御退官記念論文集委員会	5. 総ページ数 115
3. 書名 増山賢治先生御退官記念論文集	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

<p>Web連載『バイエルの謎』その後～無自覚な音楽史（音楽之友社サイト）  <a href="http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo/index.htm">http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo/index.htm</a>  Web連載『バイエルの謎』その後～無自覚な音楽史（音楽之友社サイト）  <a href="http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo/index.htm">http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo/index.htm</a>  バイエルの謎～その後 第11回 バイエルのライプツィヒ時代 ～トーマス教会聖歌隊員としてのバイエル  <a href="http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo/11.html">http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo/11.html</a>  バイエルの謎～その後 第12回 ライプツィヒ時代のバイエル・・・自覚された音楽史と無自覚の音楽史  <a href="http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo/12.html">http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo/12.html</a>  バイエルの謎～その後 第13回 1819年のライプツィヒ音楽界の定点観測  <a href="http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo">http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo</a></p>
---

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------